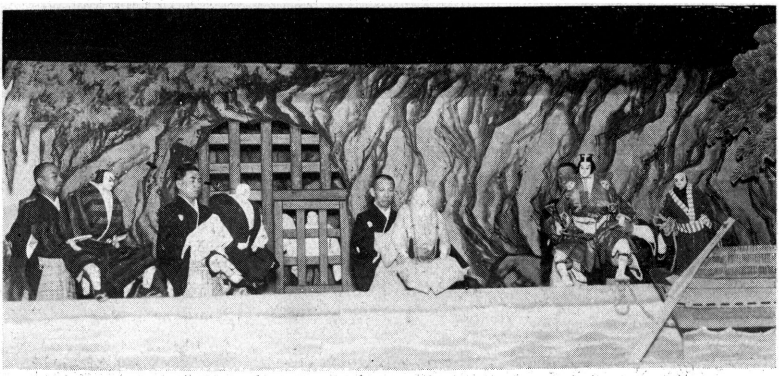
面頰帳

昭和六年四月号

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和六年三月三十一日印刷納本
昭和六年四月一日発行

日蓮上人

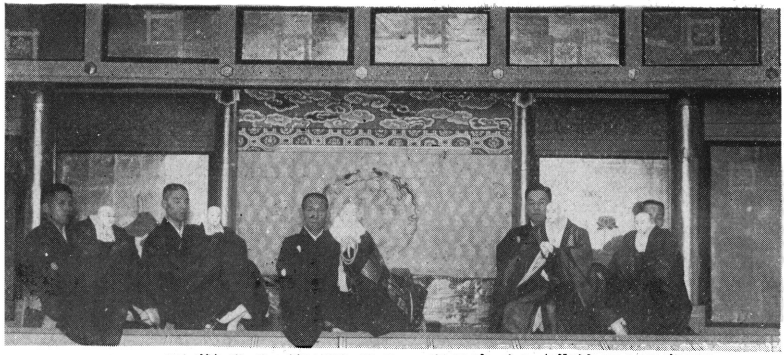
「日蓮聖人御法海」法論石の段・日蓮（榮三）



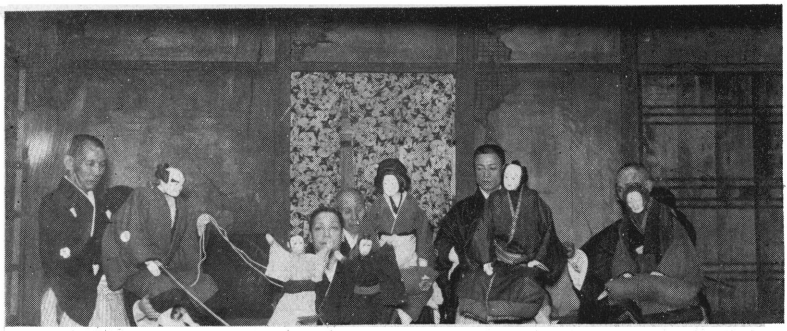
「同　上」土牢の段・四條金吾（扇太郎）日蓮（榮三）朗日（紋十郎）岩淵（玉德）

「同　上」塚原三味堂の段・日蓮（榮三）朗日（紋十郎）

「同　上」龍の口の段・東條判官（玉幸）平塚丹平（傳之助）日蓮（榮三）



（三榮）蓮日（郎十紋）朗日・段の寺門本「日蓮聖人御法海」



（郎太扇）衞兵傳（吉兵小）母郎次與・段のし廻猿川堀「引達の原河頃近」
（三榮）郎次與（郎五文）んゆしお

（郎五文）んゆしお（郎太扇）衞兵傳・段のし廻猿川堀「上　同」

（龜政）慶　蔣（郎十紋）丸若牛・段の橋條五「巻略三眼法一鬼」

・・文樂座四月興行・・

新作塚原三昧堂に就て

食滿南北

新作と銘を打つ方がいゝのでせうか。それとも舊來からあつたやうな態度で知らん顔をしてゐるのがいゝのでせうか。

私は、津太夫氏から賴まれて「日蓮聖人御法海」の佐渡塚原三昧堂の段を書卸すに就てかう云ふてわが社長にはかつたのである。

「サア」社長も亦ちよつとは迷はれたらしい。

どつも淨瑠璃の「新作」なんていふものはさう有難いものではない。

ましてこの佐渡など、云ふものは可なり芝居なんかでは演りつくしてゐる。今更らしく「新作」など云ふのは氣耻かしい氣がする。しかし全くの新作なのだ、高祖遺文錄から佐渡の御消息をあちこちひろひあつめて全く新らしく作つたのであるが精神は、宗祖上人の意に反いてゐないつもりである。しかも淨瑠璃の約束をキツカリ守つてゐる。だから新味があるとは思へぬが、聖祖の敎旨には斷然違つてゐない、だから際つてその前段に描かれてゐる日蓮上人と私の描いた日蓮上人とは何處かに一貫しない點があるかもしれない。

私はかつて田中智學居士の門人であつた。さうして智律日整といふ名まで貰つてゐる。私は何だか昔の私にかへつた心持で近頃眞面目な心持でこれを描きあげたのである。すべてが淋しいので、二童子を出さうと云ふのは津太夫氏の意見であつた、さうして友次郎氏はお上人お上人しないやうに「文彌」で行かうと語つてゐた。私はこの文を艸する時、まだ其語り口は聞かなかつた。しかし五十分餘もかゝると聞いた時實際びつくりした。私は高々三十分位のつもりで描いてゐたのである。だが床本を見た時に大分にあるなと思つた。

幸ひに將來「日蓮聖人御法海」を通しで語る時必らずこの「佐渡塚原三昧堂」が中心になる樣ならば、望外の幸福である。

『日蓮聖人御法海』勘作住家に就て

豐竹古靱太夫

此度日蓮聖人六百五十年記念興行として上演せられる日蓮聖人御法海の内勘作住家の段を私が勤めますので何か執筆せよとの事ですから作者其他に就て御話し申上げます。

日蓮聖人を題材に致しました淨瑠璃は至つて少ない樣に考へます、先づ始めて義太夫節に成りましたのは享保三年十月十二日より竹本座にて作者近松門左衞門「日蓮聖人記」と題し上演されたもので、此の時の太夫役割は不明。其後三十ケ年後の延享四年十月、江戸肥前座に於て「いろは日蓮記」と題し上演、又二年後の寛延二年十月八日、近松門左衞門作當世並木宗輔添削と有りまして、此時の外題は「日蓮記兒硯」と成つて有ります。尤も前のいろはも兒硯も近松作の日蓮聖人記の添削成る事は正本の外題角書で明かですが始めの院本がありませんから慥に同じ物とは云へませんが江戸肥前座上演の物は同じであります。

江戸の日蓮外題の時の役割も番附が有りませんので不明。其の次に同寛延四年十月十日初日で、大阪道頓堀豐竹座で外題を「增補日蓮聖人御法海」と改題して上演。此の年寶曆元年と改元、日蓮記兒硯の丸本と御法海の丸本とを見比べますと、文章は多少違つて居ますが結構段取は同一で、何れも三段目の勘作内の段は最も作者の技巧を凝らした場面であります。

此作者は並木鯨兒、並木正三、添削者淺田一鳥、並木宗輔で此時勘作内の切を語られましたのは初代此太夫、後に豐竹筑前少掾藤原爲政を受領された師であります。

其後永らく此外題が上演されず享和二年に至つて、十月十五日より大阪北堀江市の側芝居にて初代豐竹麓太夫師が勤め

られ、其後二世土佐、播摩大掾師、初代巴太夫師、二世巴太夫師、四世綱太夫師、藍玉組太夫師、初代豊竹三光齊師、三世氏太夫師、初代大隅太夫師、三世長門太夫師、初代長尾太夫師、初代古靱太夫師、四世住太夫師に依つて上演されましたが明治廿一年十一月、同廿六年十一月、同三十年十一月、同四拾一年十一月と四回御靈文樂座で上演、右の内三回は越路後に攝津大掾師が勤められ、一回は私の師匠先代津太夫が語られました。此間に彦六座、明樂座、堀江座各人形芝居で六世時太夫師や、五世住太夫師並びに今の土佐太夫師が伊達太夫時代に勤められて居られますが文樂と致しましては、二十四年振りで上演される事になりました。申述べました通り各名太夫、師匠方の語られましたものを未熟の私が此度初役として勤める事に相成りました。

御存じの方も御座いませふが、右作中の鵜飼ひ勘作と云ふ者はないものだそうで、私が甲州へ巡業致しました時、甲府市から一里廿町、石和驛より十町餘りの所で、鵜飼村鵜飼濟度之舊跡鵜飼山遠妙寺々内に勘作の墓、實は平大納言時忠公之墓所とありました。此方が此所へ流罪になられて後に鵜を遣ひ、殺生禁斷の場所へ網を入れ簀卷の刑に行はれ、其亡靈を聖人が成佛解脱せられし事を仕組んだものだと彼地の人は話して居られました。

此勘作内の段は淋しい物でありますが、後半は節附けも又反對に賑やかに出來てありまして、どうかすると踊る樣に成りますから氣をつけて語らねばなりません。すべて義太夫は一段の内、前半段が特に六ケ敷き物となつて居りますが、此勘作内も其例に洩れず勘作の出、又詞等由來難物とされて居りまして淨瑠璃の内でも余り男の幽靈が物を云ふ事は數なき物とされて居ります。

甚だ纏つては居りませぬが之にて日蓮聖人御法海勘作内に就ての私の所感を申述べ此稿を終り度いと存じます。

（昭和六年參月廿八日記）

勘作住家の段人形割

庄屋德藏	吉田玉次郎
勘作の母	吉田玉七
經市	吉田文二郎
本間六郎左衞門	桐竹門造
女房おでん	吉田文五郎
勘作の靈	吉田市松
日朗法師	桐竹紋十郎
日蓮聖人	吉田榮三

・文樂座四月興行上演・

食滿南北　新作　鶴澤友次郎　竹本津太夫　作曲

『日蓮聖人御法海』

佐渡ケ島――【塚原三昧堂の段】

（床本）　塚原三昧堂の段（口）

さる程に日蓮上人は龍の口の御法難ふしぎにお命つゝがなく再び下る嚴命は佐渡へ流罪の御うき目、然るにこの國の念佛の行者昔北面の武士遠藤左衞門尉爲盛阿彌陀如來を信仰のあまりに今は阿佛房ひそかにしのぶ塚原の三昧堂に程近くひとりうなづき聲ひそめ阿彌陀如來にお誓ひ申し上げる念佛無間禪天魔眞言亡國律國賊と諸宗を罵しる日蓮坊人手をかるまでもなし法敵打とり災の根を斷ちまふすべく南無阿彌陀佛と唱ふる爲盛千日尼は走りよりマア〳〵まつて爲盛殿フムさ云ふは妻の千日尼か阿彌陀如來に誓ひを立て日蓮坊を打取るにナゼ止めるそこのきおらうとはげしき言葉妻は悲しさ押かくし、もし阿佛坊吾等をめをとは佛の道とくにも悟り法號を受けて有髮の比丘比丘尼それに白刃を血に染めて阿鼻の地獄に墜つる氣か上人樣はこの世から活き佛にておわします殺生戒はやめてたべ拜むわいのと手を合せば爲盛はとつてつきのけくどくどとやかましい活き佛の日蓮なら鎌倉殿のお叱り受けこの佐渡へ流し者にはならぬ筈まして諸宗を罵しる上念佛無間とぬかせし坊主法敵をうちとるは、これも方便佛弟子のつとめなるわすさりおらうとねめつくる妻はあるにもあられぬ思ひコレ阿佛坊殿お前もげんざい間答して上人樣に云ひまけたを遺恨に思ふての刃物三昧であらうがなエ、默れ女房男のする事女のさし出るところでないわ、のけ〳〵〳〵と爭う夫婦雪はしとゞとふりしきる地獄の責か八寒のこの世からなる修羅道の業苦の程ぞ怖ろしけれ如何はしけん千日尼ド

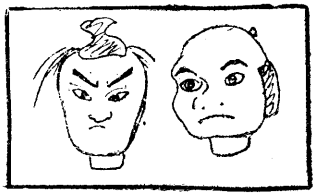
ひとまろべば南無三寶さすが夫婦の恩愛に抱き起して如何いたした怪我ばしせぬかといたわればもうし妻をいたわるお心根その佛性を其儘にナゼ上人をうたるゝぞ助けたまへと諫むれば弱る心の爲盛はたよりも惡しと打うなづきフム一旦は妻の言葉立つるも佛へ報恩のこれも一つの道ぞかしうれしう御座んすそれならこの儘歸宅いたして刃をおさめん忝じけなしとふしおがみ底の心は白雪の道踏みわけて兩人は我家へこそは歸りゆく。

（床本）　塚原三昧堂の段

謠がかり〳〵濁刧惡世の中にば多く諸〳〵の恐怖あらん惡鬼其身に入つて我を罵詈毀辱せんと妙法華經勸持品にこそ說かれたれされば此處に遠流の身北國の寒山佐渡が島心身共に塚原や如說修行の三昧堂雪は一丈軒は六尺風荒波に横とほる銀河にあらぬ白妙や不輕菩薩を今目前法華の行者日蓮上人扉を開きふりしきる吹雪の空を見やりたまひアまことやな竺の道生は蘇山に流され法道三藏は面に火印されて江南に流罪の身となる是皆法華經の德佛法の故なり吾は日本國東夷東條安房の國海邊の旃陀羅の子徒らに朽ち果てん身を、法華經の故に捨てまいらせん事これ石を黃金に代ふるに非ずやアラ尊やと御自作の釋迦牟尼佛の御像に御手を合せ唱題の御聲もいとゞすみ渡る折から雪をかさこさ人こそ來れ島の子がほだをあつむる高調子波よ來い〳〵此處までござれヨオイヤサ、舟に帆あげて帆あげて舟に鷲の御山の麓までヨオイヤサ、唄ひつれ〳〵雪の軒來かかる童子を見やりたまひヤヨ童、明暮人の來らぬ庵殊に見馴れぬおこと等は處の者か但し又よその里よりつるかたづねに童子は聲清く上人樣がこのいほりに一人淋しくおぬでと聞きお慰みと存じまして二人で此處まで參りましたとやさしき言の葉嬉しくオ、よくぞたづねまゐりしな去歲今月十日相州依智の鄉を立ち久米河の宿あとに見て越後の國寺泊それを本土の見納めにこの大海を涉り來て雪よ雪海より海のその外は慰むよしも荒磯の島守る翁となりはつるわれを音のう嬉しさよと〳〵島の物語りめづらしき事聞かまほしとのぞみたまへばわらべ達扇とり出し身をかまへそらふ手振の面白や天津島根にゆるぎなき國の柱や大舟の人を渡しの惠の深みヨイヤヨイソロエッシッシエッシッシ、わだづみの底龍神の聞きも洩らさぬ八の卷蓮華もひらく八葉の水のにごりにましぬ華露を玉とぞきよげなる、ヨッシッシエッシッシ、それかあらぬかこの島の黃金の花のふり候、ふるや散華のとことわに淨土とこそは申すなれ、ヨイヤヨイソロ、エッシッシ、エッシッシ、唄ふも舞ふも上人をたたふる童いぶかしとこなたは威儀を正し給ひ優しの童よくも來りてなぐさめくれしぞさりながら不思議なるおこと等そもや何處より參られしぞ語りたまへとたづぬれば、二人はいつか白絹の羽袖に似たる御姿スツクと立つたる氣高さよ過ぎつる頃龍の口の御道すがら鎌倉八幡社頭にて御僧の口づからヤヨ八幡何とて法華の行者をば守らせ給はぬ不思議さよ諫め給ひし御言の葉、今で使ひを送るべし頭の白き烏こそ軒端に近く飛びこうならば御赦免の日と知らるべし夢疑ひ給ふなよ、さらば〳〵とばかりにてあと白雪とちりしく靈鳩ずがたは消えて失せにけり上人莞爾と笑傾けオッ扨は八幡大菩薩の吾を守らせ給ふしるしか、今ぞ思ひ當たり御經に曰く天の諸〳〵の童子以て給使を爲さん、刀杖も加へ

ず毒も害すること能はじとか頓て赦免の日をまちて一天四海皆歸妙法我等の望みも近きに成就アラ嬉しや忝じけなやと如來の尊像ふしおがみ扉をとざし入り給ふ誠に本化上行の再誕とこそ拜まるゝ折しも庵の軒近く忍びよつたる阿佛坊爲盛念佛の怨敵法の仇、身はぬれ鷺の小鮎を狙ふ刀の目釘しめやかにおのれ日蓮眞二ツとかたへにこそは身をひそむ影白雪を踏みしめて何と千里の山河を越えて波濤のおきふしや、やつれ果てたる筑後坊恩師を思ふ誠心にやう〳〵たづね日朗が埴生の小屋にたどりつきこれかと見るや目もうるみ聲細々と呼び立つる師の坊はおわするか筑後まゐつて候ぞや弱る心を取直し、這ひよる竹椽師弟の緣し耳にこたえて上人は扉のすきより見給へばまごう方なき日朗法師思はずまろび出たまひ、サ云ふは筑後坊日朗ならすやオッ師の御坊にてましませしか筑後であつたか、お師匠樣と、たえて久しき對面に先立つものは涙にて軒の氷柱や雪解の水ぬるゝ秡の右左、御懷かしや無事なるかと互に手と手顏と顏見上見下す嬉し泣き、しばし言葉もないじやくり上人御座をあらため給ひ久方の對面に取亂せしは不覺の至り筑後坊御身は吾と諸共に囚へられて土牢に法難うけし身なりしに如何致してこの孤島へ誰に許されて來られしぞ、たづねに日朗聲うるませ師の御坊の御消息に牢をば出させ給ひ候はゞ疾くとく來り給へ見奉り見えたてまつらんとの有難き御仰せ宿谷殿の情にすがりしばしの程を許されてそも鎌倉に立出でて人目しのぶのすゝきにあらぬ野末の床の假枕幾夜寢ざめの寺泊やう〳〵波濤のり切つてこれまでは來つれどもこの大雪に道さへ知れずたづぬる人も荒波の磯にさまよふ島千鳥、泣くねしのびてはる〳〵と、これまで參りまして御座りますと云ふも寒氣にとぢられて齒の根も合はぬふるひ聲、哀れと見やれど身命を惜まぬ上人御聲高く未練に候筑後坊うき事のなほこの上につもれかし限りある身の力ためさん日蓮の弟子旦那は護法弘通の其爲に身命は惜まぬ筈御身鎌倉をあとにしてここへ來らば何者が、かしこにあつて法華經の折伏の修行誰がするまみえやうと申せしは靈山淨土を指したるなれ佐渡は小さき孤島なり、この島の教えは日蓮一人にて事足れり、ハヤ〳〵鎌倉へ歸られよ寢てもさめても法華經の弘通に一心こもりたる恩師の言葉合掌の肝にこたへて筑後坊ハッと計りに兩手をつき御教訓今更に恐かの日朗が胸にめいじたりさりながらこの島守の朝夕を誰が供養せん勿體なしせめてお傍にあり海山より高き法恩の萬分一をつくさんとすがりなげけばとつてつきのけ

過去の不輕菩薩は法華經の御爲に杖木瓦石を蒙り師子尊者は頭を刎ねらる天臺大師は南三北に七あだまるゝ皆是御法の爲ならずや日蓮は諸天善神守護の身ぞ筑後坊には都弘通の大任あり、ハヤ〳〵歸りて不惜身命逆化の修行を怠るまいぞ、ササ其お言葉背くにはあらねども弘通の爲には猶更に大切なは師の御坊如何に御法の爲とはゆへこの北國の雪の空、戸ざしも嵐吹き通ふ八寒地獄まのあたりせめては梶の御給仕と又立寄るをハツタとねめつけ日蓮とて日朗とて私の命にあらず皆法華經の行者ならずや凡情のなさけは墮獄の因緣とく〳〵此處を立去りおれとはげしき言葉是非なくもハツと計りに立ちあがれど、はるばる來つる孤島の軒、逢ふが別れの束の間を悲しやのうと見返ればさすが師弟の恩愛に凡夫にかへる愛き涙檀特山の涙別も、かくやと計り雪解して落ちて流るゝ谷川の水嵩まさる如くなり、日朗やう〳〵氣をとりなほしもつたる包とく、〳〵も師の御坊に奉らんと御たしなみの橘を持參いたして御座ります、日朗の身にかへてお傍へお置き申しますると、さし出せば打いたゞいて如來にさゝげ筑後坊の供養日蓮嬉しく思ふぞよと佐渡は吾等の本懷をあらはす爲には大事の場所折伏逆化の道しるべ御本尊をば顯はし申さん何かはやがて歸國の上エツイヤ歸國の上は弟子檀那に日蓮無事と傳へられよ紙さへあらぬ佐渡が島よりなに披露あるべしと唱題の聲朗かに更に餘念はなかりけり、それではどうでもエイ未練であらふぞハツタととざす庵の扉雲山萬里師弟の別れ雪はしせきもわきまへず降り積む中を筑後坊ま一度お顏とふりかへりよれば吹雪にへだてられ見へわかぬ師の御かげをのび上り見る雪の道すべる足もみ踏みしむる氣强く追ふも法の爲さすが別れの惜しまれてソツとのぞけば立戻るえにしも深き白雪をあとに見すてゝ日朗はまた鎌倉へ引かへす心のうちぞ哀れなりあと見送つて上人は思はず椽へまろび出で許してくれよコリヤ日朗波濤へだてしこの島へはる〳〵たづね來たりしをつれなく返すも法華經の如說修行の爲ぞかし恨みとばし思ふなよ恩愛慈悲の御なげ尊くも亦なげなり。爲盛はこらへかね、太刀なげ出し雪に手をつき驚き入つたる上人の御志御法の爲に御弟子を追ひかへさるゝかゝる尊きひじりともしらず白刃を當てんとせし大逆無道のこの爲盛イデ存分にめされよかし、大地にドウと座をしむれば上人ニツコと笑傾け愚かや爲盛すでに龍の口にて此首うたれんとせしさへ諸天の加護を受けたる身ぞ御身の妻の千日尼ひそかに吾に仕ふる此頃おことも心ひるがへし法華經の爲につくされよと聞くに小かげを千日尼走りよつて有難涙上人樣だん〳〵とのお情有難う存じまする兩手を合はしふしおがめば妻の供養は阿佛坊の供養今より日得とあらため折伏の修行めされよかし、ハツハツと頭を白雪にうづめやもう其折から飛びかう軒のむら鳥上人きつと見たまひてオツ歸るべき時は來にけり烏崎八幡大菩薩の御託宣今ぞ思ひ當たり開くや法のはちすばに東天紅とくだかけの惠はふかき日の光思はず合はす三人の手南無妙法蓮華經の今又も都にかへり咲き末世を救ふ上行のその再誕の佐渡が島、有難かりける次第なり。



猿廻しは世話物の錚々たるもの

竹本土佐太夫

私は文樂座四月興行で、中狂言の「近頃河原達引」堀川猿廻しの段を語る事になりましたので、些さか所感を陳べさせてもらひます。

此の狂言の作者は中村重助で、第一祇園の段、第二揚屋の段、第三河原の段、第四堀川の段、第五道行涙の編笠、第六聖護院の段、此の六場面から成立つてをります、近來は歌舞伎でも、あやつりでも、河原と堀川としか演じませんからお俊傳兵衛の生死も不明になつてゐますが、大詰迄演じますと、傳兵衛の手にかけた横淵友左衛門は、悪事露見して罪せらるべきであつた事がわかり、傳兵衛は助命せらるゝ事に成つてゐます。事實は情死したのですが、さうしては可愛さうでもあり、大詰が陰氣になるから、見物人の喜ぶやうに仕組んだのでせう。

私が大阪の芝居で、初めて此の猿廻しを演つたのは明治三十九年一月堀江座で、切狂言に之を出し、追出しに道行を加へました。次は明治四十四年五月同座で語り、此時大隅太夫が文樂座から轉座して中幕に佐倉惣五郎を語りました。三度目は大正四年二月文樂座で勤め、此時三代目越路太夫が紋下にをはり、人形使ひの三代目玉藏が這入つて來ました、四度目は大正十一年六月文樂座で中幕に語り、大切に今度と同樣橋辨慶でした。五回目は大正十五年九月文樂座の盆替りで吉三郎が七代目吉兵衛になりました。そして今回は六回目に當ります。

名文ではありませんが、趣向が面白いのと、與次郎の正直一圖や、母親の粋な言葉や、お俊の純眞な情操が快よい感じを與へましてお客をほへりとさせます。そして初めには鳥邊山の稽古があり、仕舞には猿廻しがあるので、前後對照して場面が陽氣にもなり特種の美感を起します。節付の上から見

ましても流石に代々の名人が工夫をこらしたものほどあつて少しも抜目がありません。鳥邊山の唄は地歌から來たのですが、義太夫の三味線の手が巧に取手れてありまして、語つてゐるうちにも自然と興味が湧いて來ます。

人物の性格が前にもいふ如く夫れ〳〵によく出來てをりますが、中にも母親は物の知つた通り者で、酸いも甘いも嚙み分けて、少しも筋の通らぬことはいひません。「心中などしてくれたら、此母は目かいは見えず、兄はアレあの樣な憶病者」だの「人の落ち目を見捨てはと詰らぬ義理を立ぬいて、年寄りの此母につらい目見せてたもんなや」などの文句はよく出來てゐますから、語つてゐるうちにも情が迫つて自づと聲が曇つて來ます。

お俊のサワリは皆さん御承知の如く、前後二箇所ありますが、後よりは前のサワリがよく出來てゐます。お俊の眞情が籠つてゐます。そして情死の覺悟はしてゐながら、夫は隱して暗に其の心持を訴へる所に妙味があります。お客の方ではあとのサワリに重きを置いて「待つてゐました」といふ聲がかゝりますが、私などは初めのサワリの方が意味深重であると思ひます。此のサワリの文句によつて此狂言の全部が生きて來るやうにも思ひます。あとのサワリはいはゞ自暴自棄、卽ちお俊がヤケクソになつてゐるやうです。從つて言葉が露骨です。

仕舞に猿廻しを唄ふのは此の場面としては少し無理です。文句にも「祝ひ唄ふも聲低に」とある位ですからさう花やかに大聲を出してわめき立てゝは、全部の情景を叩きこわして仕舞ひます。それでもお客は、アノ花やかな三味線を期待してお聽きになる樣になつてゐますから、此の節附をかへるのは容易な事ではありません。それで私は一工夫して、極古い所の節を取り入れて見やうと思つて、よほど研究したのですが効果はどふか判りません。

缺點をさぐれば、何の狂言でも完全なものはありません。此の狂言も缺點は隨分ありますが、それでも何しろ昔から能くはやつた狂言で、どこへ興行にまゐりましても、此の狂言の出ない所はありません。私などは一つ土地で所望せられて二度も演じた事があります。世話物では野崎、壺坂、紙治の炬燵などが受けのよい狂言ですが、猿廻しは其第一位に置かれてゐると思ひます。かやうに此の狂言はザラにおまして、お客の耳にもしみついてゐますから、よほど上手に語らぬとすぐに半疊を打たれます。洗錬した上にも洗錬した、水の垂れる樣なことをいひたいと想ひますが、それが又容易に出來ないので困ります。藝は垢ぬけがして、枯れて來ねば、入神の技とはいはれませんが餘り枯れ切ると淋しいといふ弊が起ります。通人のお客には受けますが、お若い方には受けません。そこで其の中庸をとらねばなりませんがこれが又一ト苦

勞です。

同じ都も世に伴れて田舍がましの薄烟り」といふ文句には種々疑問がありますが、これは文學上の事ですから、私は茲には申しませんが。又「戸口を明くれば走り行く」の文句にも疑問がありますが、これは「走り行く」といふよりは「走り入る」といはぬと情が乘らぬ樣に思ひますので、原文を捨て「走り入る」の說を取つてゐます聞くとか讀むとかでばさうはありませんが演じてゐると「走り入る」でないと情が籠りませんから近きを上げて住太夫、大隅太夫、大掾各師皆走り入ることが本立の通りでないと注意した識者があつて大掾師匠は「走り行く」と語るやうに成りました。お俊は少しも早く傳兵衞の顏を見たいと戸の外であせつてゐた樣に想はれます、兄が出て來るのを見て、逃げ出すものとは想はれません。併し作者はどういふ心でかいたのか疑問は全く解けませんが、何れにしても此處の文章は少し曖昧です。

人物中では傳兵衞が一番語りにくいのです。町人であつて士魂があるのですから硬くなり過ぎては武士になるし夫かといつて忠兵衞や治兵衞の樣にグニャついてもいけず、つかまへ所がむつかしいのです、歌舞伎で此の役を上手に仕活かしたのは尾上菊之助氏でした。此の人は延壽太夫氏の舍弟で五代目菊五郎の養子になつてゐました、何でも若い時素行が惡くて五代目に勘當されたとか歸參が叶つてからスツカリ精神を入れかへてコロリと藝が變りました　五代目が明治座で與次郎を勤めた時本物の生猿を使ひましたが馴れてゐないからいふ事を聞かず、見物人をひつかいたりして失敬した事もありました夫れはコリ過ぎてゞした。此時の傳兵衞が卽ち前にいふ菊之助氏でこれが非常によかつたのです、前後にないよい傳兵衞で夫れから菊之助の名は益々出ました、お鶴を今の小松島屋が子役時代で土之助といひ五代目の與次郎に口上をいつてもらつた事を私は五代目と親戚同樣の交りでしたからいつも見に參りましてようおぼえて居りました。

亡師攝津大掾も堀川は大得意の出し物でした。先代大隅太夫も屢々語りました。そして兩師とも夫れ〳〵に長所がありました。私も身分相應の特色を見せたいのですが、うまく行くかどうか分りません。三年五月には古靱太夫氏が語つて好評でありましたが此の人は却て原文によつて語られたやうでした。まだ〴〵話しはありますが、餘り深く立入つて難かしい事を申しますと却つて解りにくうなりますから、此邊でやめて置きませう。

（四月一日記）

堀川猿廻しの段人形割

與次郎の母	吉田小兵吉
弟子おつる	吉田文之助
兄與次郎	吉田榮三
娘おしゆん	吉田文五郎
井筒屋傳兵衞	吉田扇太郎